

精研式文章完成法テスト (SCT) 評価と評価者のパーソナリティ の関係について

1. 概説	75
2. 方法	83
3. 結果	85
4. 考察	93
5. 文献	95

研究ならびに当稿執筆過程において多大なるご援助をいただいた方々のお名前を記し、改めて感謝の意を表したいと思う。

岩熊史朗氏

西村麻由美氏

慶応義塾大学産業研究所の歴代職員の皆様

慶応義塾大学文学部旧横田ゼミナール所属の学生の皆様

伊藤ひろみ氏

執筆者紹介

まきた ひとし (慶応義塾大学名誉教授)

いとう りゅういち (尚美学園短期大学助教授)

1

概説

1. パーソナリティ……………75
2. 精研式文章完成法テスト (SCT) ……76
3. SCT セミナー ……79
4. SCT によるパーソナリティ診断 ……79
5. 評価と評価者パーソナリティの関係…81

精研式文章完成法テスト (SCT) を開発してから 30 年近くの年月が経過した。永年, SCT によるパーソナリティ診断や, 診断法の教育訓練を続けていると, 訓練効果が高いことも分かるが, それと同時に, 評価と評価者のパーソナリティ属性との間に興味ある関係のあることが経験的に分かるようになってきた。この問題に関しては, 我々もすでにいくつかの報告を行っているが, ここでもう一度, 慶応義塾大学産業研究所主催の, 企業人事担当者を対象とした, SCT セミナーの評価データを用いて, 検討を重ねることしたい。

なお, 当報告の一部は日本心理学会第 56 回大会において発表されている (伊藤ら, 1992)。

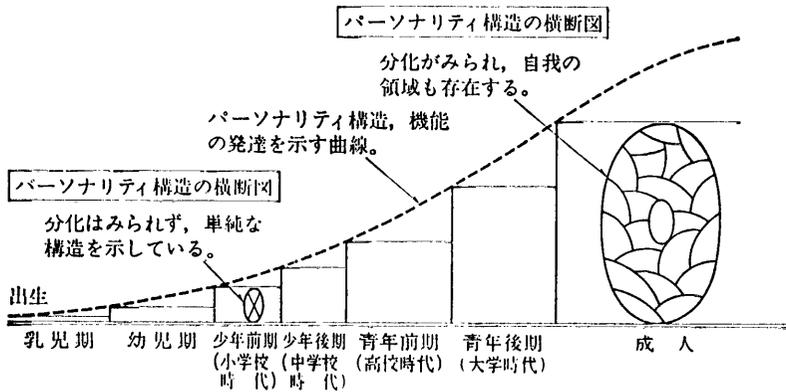
1. パーソナリティ

パーソナリティの捉え方にはさまざまな立場があるが, 我々は, 実際に把握しようとする観点から, 次のように捉えることが可能であろうと考えている。

「個人は物理的・社会的・文化的環境の中に住み, それらの影響を受けながら, しかもまた, それらに対してある影響を与えていく 1 つの存在で

ある。そして, 環境に住みながら環境に影響をあたえていく, そのような個人の統一体をパーソナリティと見ることができる。その統一体の主な生理的・神経的基盤は脳にある。すなわち, 脳は有機体の行動の統一の所在であり, 感情・意識葛藤・決断などの座である。ゆえに, パーソナリティは脳に局在される。しかしまた, 脳の究明が生理学的に可能になったとしても, それはパーソナリティの個体的 (constitutional) な素材ではあっても, パーソナリティそのものではない。また, 我々は直接的には脳における生理的過程を見ることはできないが, 統一体としてのパーソナリティの構造はその個人の言語や行動によって知ることができる。ここに心理学の対象が存在する。ゆえに, 心理学者の究明する対象はあくまでパーソナリティそのものである。そして, パーソナリティとはその個人の生まれてから死ぬまでの一続きの系列 (人生) である。すなわち, パーソナリティの歴史がそのままパーソナリティそのものであると考えられる (Kluckhohn, Murray & Schneider (1953))

パーソナリティをこのように捉えると, まず問題となるのは, それをいかに把握するかというこ



点線の如く、パーソナリティは発達していく。それにつれてパーソナリティ構造は分化し、その中に種々な領域を生み出す。それらの統一体としてパーソナリティは考えられる。このような漸進的な発達過程を幾つかのエポックに切って、その時期を象徴的に同一レベルとして把握するのが実際には便利である。実線はそのような各時期の漸進的な発達を無視して、幾つかの段階にしたものを示す。

図 1-1 パーソナリティの発達過程

とである。そのためには、構造や機能が分化・成長していくパーソナリティの発達段階をいくつかのエポック（たとえば、幼児期・少年期・青年期など）に切り、その横断面を捉えるのが適当であろう。そして、そのようなエポックごとの横断面の総和としてパーソナリティを捉えることが、発達段階を軽視せずにパーソナリティの把握を可能にする。この点を図式化したものが、図 1-1 である。

次の問題は、この横断面をどのように捉えるのが最も適切で実際的かということである。槇田ら(1990)は、図 1-2 に示すようなパーソナリティのシエマをあげている。

パーソナリティの横断面は、以下にのべるような4つの側面(modality)と3つの決定要因によって捉えるのが適当であろう。もちろん、これらの側面や要因は互いに独立して存在しているわけではない。ただ一応、このように分けて捉えるのが、パーソナリティを把握する上で、実際的ではないかと考えているわけである。

第一の側面は、能力的側面である。知能、精神的分化度、見通し、評価の客観性、判断力などがこれに当たる。

第二は、情意的側面である。気質と性格を総合した、S・Z・E・H・N といった基本性格類型、意思

作用などがこれにあたる。

第三は、指向的側面である。人生観・価値観・生活態度・キャセクション・興味・関心など、その人のトータル・パーソナリティが指向している側面、「個人が価値をおいているもの」をとらえた部分である。

第四は、力動的側面である。欲求不満・ストレス・葛藤・コンプレックスなど、内面生活の「安定—不安定」の度合いをとらえたものである。

このような「現在」のパーソナリティの内容を決定づける過去の要因としては、個体的要因・家庭的要因・社会的要因の3つが考えられる。これらはパーソナリティの内容そのものではない。しかし、パーソナリティの内容だけを追求しても、どうしてそのようなパーソナリティ構造を持つようになったのかを究明することはできない。決定要因は、パーソナリティの形成過程を考える上でどうしてもおさえておかなければならない要因である。

2. 精研式文章完成法テスト(SCT)

我々の行うパーソナリティ診断の目的は、図 1-2 にあるようなシエマを知ることである。しかし、このようなシエマのすべてをただ1つのテスト

a. パーソナリティの構造

パーソナリティの内容				決定要因	
能力的側面	情意的側面	指向的側面	力動的側面	個体的要因	環境的要因
1 知能、知的作業の能率、IQ 2 人間らしい頭のはたらき、精神的分化、洞察、見通し、評価の客観性など	気質→習性→態度→価値観	気質→性格などの情意的相面のうち、比較	その人の住んでいる心理的世界の安定→不安定の度合い 攻撃、劣等感、合理化、逃避、コンプレックスなど	健康、容姿、体力、運動神経など	家庭的 家族、生育歴、家庭の雰囲気、父・母のパーソナリティ、しつけなど
		価値観、生活態度、人生観など			社会的 社会・経済的地位、生活水準、社会生活、職場の人とのつながりなど

b. テストの適用範囲

知能テスト	■					
文章完成法テスト (SCT)		///	///	///	///	///
パーソナリティ・インベントリー (INV)		■	///			
P R T (TAT)		///	■	///	///	///
DOSEFU		■				

黒い部分はそのテストがおもにねらった範囲、斜線部分はある程度調べうる範囲、白い部分は調べにくい範囲を示す。

図 1-2 パーソナリティのシマとテストバッテリー

トで知ることは不可能である。そこで、各テストの特性（どこを調べるのに一番適しているか）、適用限界（どんな年齢の人に適用したらよいか、このテストをするにはどの程度の知能が必要か、等）をよく知った上で、最も調べるのに感度のよいテストを逐次行うようにしなければならない。

我々はそのために慶応式テストバッテリーを構成し、パーソナリティ診断を行うことにしている。慶応式テストバッテリーは、

- ・精研式文章完成法 (SCT)
- ・Who Am I 技法 (WAI)
- ・基本生活領域診断技法 (DOSEFU)
- ・絵画空想法 (PRT)

などから構成されるテストバッテリーである。図 1-2 を見ると分かるように、各テスト、それぞれ狙う領域や診断の深さなどが異なっている。

精研式 SCT は、著者らの開発した投影法の一つである (SCT 研究会, 1986; 佐野・楨田, 1968;

Part I	
1 子供の頃、私は	16 将来
2 私はよく人から	17 もし私の母が
3 家の存し	18 仕事
4 私の失敗	19 私がひそかに
5 家の人は私を	20 世の中
6 私が得意になるのは	21 夫
7 争い	22 時々私は
8 私が知りたいことは	23 私が心をひかれるのは
9 私の父	24 私の不平は
10 私がきらいなのは	25 私の兄弟(姉妹)
11 私の服	26 職場では
12 死	27 私の顔
13 人々	28 今までは
14 私のできないことは	29 女
15 運動	30 私が思いだすのは

Part II	
1 家では	16 金
2 私を不安にするのは	17 私の野心
3 友だち	18 妻
4 私はよく	19 私の気持
5 もし私が	20 私の健康
6 私の母	21 私が残念なのは
7 もう一度やり直せるなら	22 大部分の時間を
8 男	23 結婚
9 私の眠り	24 調子のよい時
10 学校では	25 どうしても私は
11 恋愛	26 家の人は
12 もし私の父が	27 私が羨ましいのは
13 自殺	28 年をとった時
14 私が好きなのは	29 私が努力しているのは
15 私の頭脳	30 私が忘れられないのは

図 1-3 SCT 用紙

佐野・楨田, 1972)。通常 (必要なときは, 知能テストや, INV を行うこともあるが) 最初に施行して, 全体像を把握するのに用いる。図 1-3 のように, 書きかけの文章が載っており, 自由に文章を完成させる技法である (Part I: 1~30, Part II: 1~30, 計 60 問, 4 ページ構成)。成人用のほか, 中学生用, 小学生用があり, パーソナリティの内容と決定要因が全体的に広く浅く分かる。簡単な割には全体像がつかめて便利のため, 採用試験, 能力開発などにも広く用いられている。ただ, 使用できるようになるためにはかなりの熟練を要する。そのために, 事例集 (佐野・楨田, 1968) が作成され, 慶応義塾大学産業研究所主催の研修 (短期入門コース, 半年コース, 1 年コース) も行われてきた。

診断方法の実際については, 「1.4. SCT によるパーソナリティ診断」の所で改めて述べることにする。

3. SCT セミナー

SCT によるパーソナリティ診断の際に最大の隘路となるのは評価者の育成の問題であった。SCT の評価方法については評価者の熟練に待つところが大きい。この点についての要望に応えるものが, 事例集であり, 研修であった。事例集は 1968 年に刊行され, また, 1967 年以降, 産業研究所において人事関係の中堅管理者を対象にして SCT 評価のセミナーが開催されるようになった。1970 年前から 1980 年代後半まで行われた 1 年コースの研修の内容は表 1-1 のようなものである (最近, 短期コースや半年コースが主流である)。

この日程を見れば分かるように, SCT 診断に必要な基礎知識を習得し, 実際の評価のやり方をおもに 10 代, 20 代の男女のケースを中心に体得させるのが前期ゼネラルコースの目的であり, この時の教材は既刊の事例集を用いる。このコースの受講資格は, 5 年以上の実務経験を有し, 2~3 年以上人事・労務・教育関係の業務に携わった経験のある者である。多少の例外もあるが, 受講者の大部分はこの条件を満たした者であり, 30代, 40代が大半である。

表 1-1 SCT セミナー講座日程

コース	セッション	授 業 内 容
ゼネラル コース	1	パーソナリティ概説 (講義)
	2	SCT 評価実習 (1) 20 代後半男 (1 ケース)
	3	SCT 評価実習 (2) "
	4	パーソナリティ研究 (自習, 教材支給)
	5	SCT 評価実習 (3) 20 代後半男 (2 ケース)
	6	SCT 評価実習 (4) "
	7	SCT 研究 実習 (5) の予習
	8	SCT 研究 実習 (6) (7) の予習
	9	SCT 評価実習 (5) 20 代後半男 (6 ケース)
	10	SCT 評価実習 (6) "
	11	SCT 評価実習 (7) "
	12	SCT 評価実習 (8) 20 代後半男 (10 ケース)
	13	SCT 精神医学概説 (講義)
	14	SCT 評価実習 (9) 20 代後半女 (10 ケース)
	15	SCT 評価実習 (10) 20 代前半男 (10 ケース)
	16	SCT 評価実習 (11) 20 代前半女 (10 ケース)
	17	SCT 評価実習 (12) 10 代 男 (10 ケース)
	18	SCT 評価実習 (13) 10 代 女 (10 ケース)
後期専門 コース	1	SCT 評価実習 (1) 特殊ケース (約 10 ケース)
	2	SCT 評価実習 (2) 映画ケース (約 10 ケース)
	3	SCT 評価実習 (3) 模擬入試ケース (約 10 ケース)
	4	SCT 研究 早ヨミ (20 ケース)
	5	SCT 評価実習 (4) 早ヨミ (20 ケース)
	6	企業への応用 (講義)
	7	SCT 評価実習 (5) 認定ケース I (10 代後半の男女 10 ケースずつ)
	8	SCT 評価実習 (6) 認定ケース II (20 才以上の男女 10 ケースずつ)
	9	SCT 評価実習 (7) 認定ケース III (20 才以上の男女 10 ケースずつ)
	10	SCT 評価実習 (8) 認定ケース IV (20 才以上の男女 10 ケースずつ)
	11	SCT 評価実習 (9) 認定ケース V (20 才以上の男女 10 ケースずつ)
	12	認定, コメント

後期セミナーの受講資格は, 前期終了の上, 事例集の全ケース (約 400 ケース) を自習した者に限られる。後期の目的は, これら有資格者に, 特殊ケース (特殊なパーソナリティ, 生活歴などを持つケース), 映画ケース (ケースの面接場面を 8 ミリ映像でみせるもの), 模擬入試ケース (就職試験を想定し, ケースの書き手が受講者と直接面接するもの) などを用いて, さらに評価に習熟させると同時に, その習熟の度合いを認定し, 認定書を授与することにある。セッション 7~11 がその認定用のケースである。そして, この成績によって認定書が授与される。

当報告は, 1974~1984 年の受講者 126 名の認定ケースデータを分析したものである。

4. SCT によるパーソナリティ診断

SCT セミナーにおけるパーソナリティ把握の実際を以下に説明する。

SCT セミナー												属 G.S.X. 国 S 年 月 日 採 点	
評価用紙												氏 名	
No.	diff.	type	gilt.	H	N	secu.	comp.	ener.	const.	sit.	soci.	採 点	評 語
1													
2													
3													
4													

図 1-4 SCT セミナー用評価用紙

SCT を用いたパーソナリティ診断にはいろいろな方法が考えられる。60の完成された文章をよく読んで、その人なりのイメージを持つというのも1つの方法である。これは誰にでも出来る方法であり、この手軽さが SCT の利点の1つとも考えられる。しかし、評価の正確さについては置くとしても、複数のケースを読み、それを資料として活用するためには、評価のための何らかの枠組みが必要とされるであろう。

SCT には、図 1-2 に示したパーソナリティの内容と決定要因について自由にコメントが書き込める評価用紙が用意されている。いろいろな目的に用いられる SCT の多用途性に鑑み、自由度を多くした評価用紙を添付しているわけである。

しかし、SCT セミナーでは、目的が限定されているので、さらに定式化した評価用紙を用いて評価を行っている。セミナー用の評価用紙のイラストを図 1-4 に示す。評価用紙は、記入欄が各ケース2段になっており、1枚に10ケース分が書き込める。上段にはいくつかの項目について記号やカテゴリーで記録する欄が設けられ、下段にはその他の気づいた特記事項がメモできるようになっている。

以下、特に、ポイントになる上段の項目について説明していく。

(1) diff.

パーソナリティの内容のうち、能力的側面を代表させるために設けた項目で、精神的分化度

(mental differentiation) の省略型である。

時間的・空間的見通しのよさ、洞察力、自己や環境評価の客観性、判断力などを総合した、知能よりもさらに、実際の「適応」にきいてくる知的能力の指標である。

知能と同様の分布をしているという想定のもと、原則的に、低い方から順に、- - - - - ± + + + + の5段階で評価を行うことにしているが、熟練してくると、その中間、さらにその中間といった評価をする場合もある。例えば、± ~ + は ± と + の中間、± ~ は ± と ± ~ + の中間、~ ± は ~ ± と ± の中間といった具合である。

(2) type

情意的側面を代表させるために設けた項目であり、基本性格類型を記入する。より先天的要素の多い「気質」としてクレッチマー、シュルドンの3類型、それに彩りを添えるものとして、後天的要素も加味された「性格」の2類型をもとに、基本的な類型を大文字で、それに準ずるものは小文字で表すことにしている。

基本性格類型の解説を表 1-2 に載せる。上の3つ、S・Z・E が気質の3類型である。下の2つ、H と N が、それに彩りを添えるような性格の2類型である。

基本性格類型は、気質の3類型が基本になるので、Z, Se のように記入する。それに H や N が加われば ZH, SeNh のようになる。しかし、H や N も非常に強くなると気質を押し隠して基本

表 1-2 基本性格類型

<p>S: 分裂性気質: 瘦せ型</p> <p>内閉性……関心は自分自身の内面に向けられ、外に対しては比較的関心がない。自分の世界を持っており、一人でいても寂しくない。エネルギーはもともとあまりある方ではない。自分自身の考え方を持つ →非社交性、孤独性、冷たさ、自我の強さ、利己的、空想性、思考性</p> <p>両面性……「敏感」と「鈍感」の共存。敏感な面には少し触れられただけでも鋭く反応するが、鈍い面には土足で踏み込まれても平気である →辛つ、繊細、過敏、鈍麻、無関心、ぐず、不精</p> <p>精神的分化度の高い人は、理論的に鋭い考え方のできる人が多い。いったん心を開くと、豊かな内面性を見せてくれる。 精神的分化度が低くなると、S特有の鋭さはなくなり、内面も乏しく、グズといわれるような性格になってくる。</p>
<p>Z: 循環性気質: 肥満型</p> <p>同調性……人々と共に生き、開放的である。周囲に同調するタイプ。エネルギー量が比較的多く、スタートダッシュ型。「食う・寝る・遊ぶ」 →社会的、融和性、現実性、大まか、不注意</p> <p>両極性……元気が動いていたかと思うと、理由もなくしょぼりしたり、気分や感情に長周期の波がある →快活、陽気、おしゃべり、愛憎、無口</p> <p>精神的分化度の高い人は、回転の速い頭の動きをし、活動的で、生きている現実の問題を追いかけのが好きである。 低くなると、オッチョコチョイで、自分の感情や目先のことで行動する。</p>
<p>E: 粘着性気質: 筋肉質</p> <p>粘着性……こつこつと粘り強く、几帳面で、物事に熱中する。出足は遅いが、一度走り出すといつまでも走り続けるエネルギーを持っている。 社会通念や規律に従い、馬鹿正直で、頑固な面がある</p> <p>爆発性……ぎりぎりまで粘る反面、急にカッとなる爆発性を持つ。いったん怒り出すとあとを引くことも多い →興奮性、蓄積性</p> <p>精神的分化度の高い人は、礼儀正しく、社会常識に富んでいる。緻密な頭を持ち、手堅く粘り強く仕事を進める。 低くなるにしたがって、爆発の傾向が強まる。</p>
<p>H: ヒステリー</p> <p>顕耀性……自己顕示欲が強く、自分を良く見せようとする傾向。 →自己顕示、虚栄、勝気、派手好き、人気取り、くやしがり、他罰的小児性……社会化が十分でなく、わがまま、無反省、移り気といった未成熟な感情を持ったまま大人になる傾向 →わがまま、移り気、無反省、好き嫌いが激しい、被暗示性</p>
<p>N: 神経質</p> <p>劣等感……自分に自信が持てず、弱気。過度に考え込んでしまう場合がある 不安定性……寝れやすく、長続きせず、あきらめやすい →心気性、自罰的、弱気、取り越し苦労、劣等感、作業不全、強迫的</p>

類型として前面に出てくることがある。こうした場合には、H, Nsなどと表す。

さらに、混合型や diff. が低くて基本性格類型が見えないような場合には M (miscellaneous)と表記する。

また、精神病質、異常性格、精神病などのケースでは、P (Psychotic) と表すことになっている。

(3) gelt. (G)

顕耀性 (geltungsbedürftige: 略して「G」) の程度を3段階に評価する。

普通程度を±, 少し強い程度を+, 相当強い程度を++として表す。これも diff. 同様中間の評価が現れる。

(4) H

顕耀性と小児性を総合したヒステリーの程度を

3段階に評価する。評価符号は (3) と同様である。

(5) N

神経質の程度を3段階に評価する。評価符号は (3) と同様である。

(6) ener.

ケースの持っているエネルギーの程度を5段階に評価する。評価符号は diff. と同様である。

(7) 採否

採用試験用の SCT としてケースを評価した場合を想定し、採用するか、不採用とするかを、受講者に尋ねた。5段階に評価し、採用の場合+以上、不採用の場合-以下、判断がつかぬ場合±の評価をするよう求めた。

榎田は、精研式 SCT の解説書 (佐野・榎田, 1972) の中で、1970, 1971 年の SCT セミナー受講者 42 名のデータを分析した。そして、diff. については、かなり高い正答率が得られたが、評価が辛めに偏り、また、時間を追ってやや正解に取れんする訓練効果が見られたことを報告している。また、type については、diff. ほど高い正答率が得られなかったことを報告している。

5. 評価と評価者パーソナリティの関係

Allport (1961) は、良い評価者の資格として、次の9つの条件をあげている。

- 1) 人間性に関する豊富な経験
- 2) 被評価者との共通の体験
- 3) 優秀な知能
- 4) 複雑なパーソナリティ了解のための認知の複雑さ
- 5) 正確な自己認知
- 6) 社会的折衝の熟練と情緒的適応性
- 7) 全体を見通すことのできる超然さ
- 8) 対象の構造における均衡・調和に関心を持つ美的態度
- 9) 人間の内面性に関心を示す内面感受性

パーソナリティ把握の際にこれらの条件、特に性格や知的能力がどのように働いているのか、我

々は過去にいくつかの実験を行って検討してきた。

精研式 SCT を用いて評価者の問題を検討した曾野 (1971) は、評価の正解率が気質 $> \text{diff.} > H$ の順であること、E の評価者は他の気質の評価者に比べて他者のパーソナリティ把握が苦手なこと、H がしばしば diff. の高さと同様に混同されることが、E の評価者と diff. の低い評価者は特に H の判断が難しいことなどを報告している。

また、榎田・櫃田 (1971) は、顔写真を用いた

印象形成実験において、評価者と被評価者の気質が類似している場合に気質認知の成績が最もよいこと、粘着気質の評価者の成績が悪いこと、被評価者に対する好感度は、 $Z > E > S$ の順であることを明らかにしている。

さらに、ビデオ映像を用いて印象形成実験を行なった伊藤・榎田 (1990) でも、S の被評価者が他の気質の被評価者と明らかに異なって印象形成されること、S の評価者が S の被評価者に高い好感度を持つことなどが報告されている。

表 2-2 刺激内訳 (diff./type: 男/女)

diff. type \	≤	±	±~	±~+	~+	+	+~	+~++	~++	++	合計
S	3/0	0/2	0/1	0/2	1/2	1/0	0/0	1/0	1/0	2/0	9/7
Se	0/0	0/1	1/0	1/0	0/1	0/0	1/1	1/2	0/0	0/0	4/5
SE	1/0	1/1	0/1	0/1	1/0	0/0	2/1	1/0	0/0	0/2	6/6
Es	0/1	1/2	0/0	0/1	1/0	1/0	0/2	0/1	0/1	0/0	3/8
E	0/0	0/1	4/3	1/2	0/0	1/0	2/0	2/2	0/0	0/0	10/8
Ez	0/0	0/0	0/0	0/0	1/1	0/1	0/1	0/0	0/0	0/0	1/3
EZ	0/1	0/0	1/0	0/1	0/0	1/1	0/1	0/0	0/0	0/0	2/4
Ze	0/1	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	1/0	1/1	0/0	0/0	2/3
Z	1/0	1/1	1/1	3/2	0/0	0/0	1/0	2/0	0/0	0/0	9/4
他	1/1	1/0	1/0	0/0	1/0	0/0	0/0	0/1	0/0	0/0	4/2
合計	6/4	4/9	8/6	5/9	5/4	4/2	7/6	8/7	1/1	2/2	50/50

表 2-3 刺激内訳 (G・H・N: 全体)

評価 \	G	H	N
±	82	36	65
±~	1	0	0
±~+	0	3	6
~+	0	0	0
±	9	42	21
+~	0	0	0
+~++	3	2	0
~++	0	0	0
++	5	17	8
計	100	100	100

表 2-4 刺激内訳 (G・H・N: 男/女)

評価 \	G	H	N
±	40/42	21/15	33/32
±~	0/1	0/0	0/0
±~+	0/0	3/0	3/3
~+	0/0	0/0	0/0
±	4/5	16/26	9/12
+~	0/0	0/0	0/0
+~++	1/2	1/1	0/0
~++	0/0	0/0	0/0
++	5/0	9/8	5/3
計	50/50	50/50	50/50

表 2-1 は 100 ケースを, diff. と type 要因でクロス集計したものである。それを男女別(男/女)に分けたものが表 2-2 である。

表 2-3 は 100 ケースの G, H, N の度合いを集計したものである。また,それを男女別(男/女)に分けたものが表 2-4 である。

これらの表を見るとケースがあまり偏りなく分布していることが分かる。ただ, G だけは±のものが多くある。

3. 評価データの内容

評価者は, 認定ケースを, 前章の「1.4. SCT によるパーソナリティ診断」に書いてある方法で評価している。ここでは, これらの評価データの中から, diff., type, G, H, N, 採否に関するデータを取り出して分析することにした。

実際には, 評価データと著者らの判定(正解)とのズレの数値や正答率を算出し, 3つの条件, 即ち, 「刺激の性差」「評価者の diff.」「評価者の type」と組み合わせることによって, 分析を進めたわけである。

3

結果

1. diff. の評価の分析85
2. type の評価の分析86
3. 採否評価の分析.....88
4. 新正答スコアによる diff., G, H, N, type の評価の分析89

表 3-1 評価者数とその内訳 (1)

1. diff. の評価の分析

まず、「3.2. type の評価の分析」までの範囲で有効な評価者のパーソナリティ・データを示す。それが表 3-1 である。それ以降の分析では、評価者についても評価データについても異なる基準を

type \ diff.	±~+~+~+	+~+~+~+	+~+~+~+	計
S	9	18	9	36
E	22	32	6	60
Z	8	14	7	29
他	0	1	0	1
計	39	65	22	126

表 3-2 diff. 集計表

誤差 ケース	-2	-1.5	-1	-0.5	-0.25	0	+0.25	+0.5	+1	+1.5	+2.0	実数合計	正答率
I	10 0.40%	82 3.29%	201 8.07%	507 20.35%	375 15.05%	444 17.82%	368 14.77%	395 15.86%	90 3.61%	15 0.60%	4 0.16%	2491	65.8
II	5 0.20%	59 2.38%	167 6.74%	614 24.80%	360 14.54%	461 18.62%	351 14.18%	369 14.90%	83 3.35%	7 0.28%		2476	67.2
III	4 0.16%	42 1.71%	198 8.06%	522 21.25%	521 21.20%	437 17.79%	268 10.91%	351 14.29%	103 4.19%	9 0.37%	2 0.08%	2457	67.7
IV	25 0.99%	77 3.06%	160 6.36%	527 20.95%	488 19.40%	515 20.47%	352 13.99%	313 12.44%	57 2.27%	2 0.08%		2516	70.6
V	2 0.09%	35 1.57%	216 9.66%	408 18.25%	426 19.05%	509 22.76%	339 15.16%	261 11.67%	34 1.52%	5 0.22%	1 0.04%	2236	71.9
N(1)	46 0.38%	295 2.42%	942 7.74%	2578 21.17%	2170 17.82%	2366 19.43%	1678 13.78%	1689 13.87%	367 3.01%	38 0.31%	7 0.06%	12176	68.6
N(2)	1283 (10.54%)			4748 (38.99%)			3367 (27.65%)		412 (3.38%)			12176	
	10481 (86.08%)												

各セルの上段は頻度、下段は比率(%)、空欄は0を示す。
 Nは縦の合計の頻度とその比率を示す。
 正答率：(ズレ0.25までの比率×1) + (ズレ0.5の比率×0.5)
 ただし、0.75のズレは0.5の中に含まれている。

用いているので、別に述べることにする。

表 3-1 は評価者を diff. と type の 2 要因でクロス集計したものである。評価者の diff. の平均は十よりやや高めのところにあるようである。また、type は、E 系が約半数、S 系が 3 割、Z 系が 2 割強という分布である。

diff. に関する分析では、槇田が、精研式 SCT の解説書（佐野・槇田，1972）の中で、1970, 1971 年の SCT セミナー受講者 42 名のデータを分析した方法と同様の手法を用いることにした。受講者全員の評価データの集計結果を表 3-2 に載せる。ここに示されている数値は、評価データと正解とのズレを集計した頻度と比率である。既に述べたように、評価はーから十までの 5 段階評価で行われている。これと著者らの判定とのズレを点数化した。1 段階のズレを 1.0 とし、例えば、十の正解に対して、十の評価をした場合のズレを -1.0、～十の評価をした場合のズレを -0.25、十～十を +0.5、十を +1.0 とした。

これを認定ケース I から V まで 5 つに分けて集計し、また、総計を計算し、ズレの分布を出した。従って、評価回数合計を示す実数合計は 126 人×100 ケース=12600 に近い値となっている（全員が 100 ケースを評価したわけではないので、実際には 12176 と、やや小さな値となっている）。

また、正答率を表すスコアとして「正答率」を

算出した。これは、正解とのズレが 0.25 以内の評価を正解 (×1) とし、ズレが 0.25 を越え 0.75 までの評価をズレ 0.5 の評価とし、半分正解 (×0.5) と決めて、各比率に重みづけして計算した値である。

表 3-2 を見ると、「正答率」が 68.6 と比較的高いこと、ケース I から V まで、回を経るごとに正答率が増し、訓練効果が見られること、評価のズレがマイナス方向に偏り、辛めの評価が多いことなどが分かる。

「正答率」を、3 条件、即ち、「刺激の男女」「評価者の diff. の高・中・低」「評価者の type の S・Z・E」別に算出したものが、表 3-3 のデータである。条件差はほとんど見られないが、女性ケースの方がやや「正答率」が高いようである。

2. type の評価の分析

type に関する分析でも、槇田が、精研式 SCT の解説書（佐野・槇田，1972）の中で行った分析と同様の手法を用いることにした。

まず、基本的な気質類型について、S-Se-SE-Es-E-Ez-EZ-Ze-Z という尺度を作り、「-」1 つ分のズレを 0.25 のズレとして表した（ここでは、+/- の符号はつけなかった）。SE の正解に対して、E の評価をした場合のズレを 0.5, Ze を 1.25, S を 0.5 という具合である。

表 3-4 に、受講者全員の評価データの集計結果を載せる。ここでは、著者らの診断結果（刺激）と評価（反応）をクロスさせることで、ズレを表している。そして、ここでも、「正答率」を表す数値である「%」を算出している。これは、diff. 同様、0.25 までのズレを正解 (×1), 0.5 のズレを半分正解 (×0.5) として算出した正答数 (N) を、全頻度 (Σ) で割った値である。表 3-4 では、太い実線で囲まれた部分が正解、太い点線で囲まれた部分が半分正解である。

全頻度は 12220、全正答数 7354.5 で、「正答率 (%)」は 60.18 となり、これは diff. より 8 ポイント低い値である。

また、「正答率」を刺激の type 別にみると、S が 68.66 で最も高く、次が E (64.74)、一番低い

表 3-3 条件別 diff. 正答率 (%)

条件	diff. 正答率	
全体	68.6	
刺激の性差	M	67.1
	F	70.0
評価者の diff.	±~---~+	68.2
	+---+~	69.0
	+~+---++	68.1
評価者の type	S	70.1
	E	67.9
	Z	68.4

表 3-4 type 集計表

刺激 反応	S	Se	SE	Es	E	Ez	EZ	Ze	Z	H・N	M	実数合計
S	1114 56.95	353 32.03	358 24.24	173 13.23	170 7.60	12 2.53	18 2.52	53 8.53	97 8.13	215 34.57	54 43.20	2617
Se	250 12.78	192 17.42	230 15.57	137 10.47	106 4.74	9 1.90	23 3.22	6 0.97	42 2.85	19 3.05	7 5.60	1021
SE	87 4.98	89 8.08	141 9.55	93 7.11	120 5.36	8 1.89	34 4.76	4 0.84	38 2.40	16 2.57	3 2.40	643
Es	87 4.98	106 9.62	186 13.20	181 13.84	232 10.37	39 8.23	44 6.18	22 3.54	68 4.30	23 3.70	8 4.80	1013
E	118 5.93	149 13.52	272 18.42	384 29.36	1155 51.61	143 30.17	200 28.01	135 21.74	197 12.44	131 21.06	9 7.20	2891
Ez	10 0.51	18 1.45	40 2.71	46 3.67	115 5.14	44 9.28	68 9.24	35 5.84	88 5.43	10 1.61	—	470
EZ	9 0.46	5 0.45	30 2.03	32 2.45	53 2.37	37 7.81	62 8.68	38 6.12	42 2.65	10 1.61	1 0.80	319
Ze	17 0.87	21 1.91	41 2.78	61 4.66	86 3.04	40 8.44	87 12.18	64 10.31	169 10.68	22 3.54	1 0.80	581
Z	86 4.40	90 8.17	125 8.46	130 9.94	140 6.28	127 26.79	147 20.59	209 33.06	725 45.80	80 9.85	11 8.80	1650
SZ	25 1.28	8 0.73	11 0.74	18 1.38	10 0.45	4 0.84	10 1.40	6 0.97	27 1.71	1 0.16	—	120
H	110 5.62	62 5.63	25 1.69	39 2.98	60 2.68	10 2.11	20 2.80	38 6.12	78 4.80	102 16.40	23 18.40	565
N	13 0.88	7 0.84	5 0.34	8 0.61	7 0.31	1 0.21	3 0.42	7 1.13	12 0.78	3 0.48	8 6.40	74
P ?	12 0.61	4 0.38	4 0.27	4 0.31	2 0.06	—	—	4 0.84	4 0.25	10 1.61	2 1.60	46
N	1412.5	687.0	881.0	750.5	1588.5	263.5	388.5	331.5	928.5	103.5	19.5	7354.5
Σ	1856	1102	1477	1306	2236	474	714	621	1563	622	125	12220
%①	72.21	62.34	59.65	57.38	70.96	55.59	54.41	53.38	58.65	16.84	15.60	60.18
%②	66.66				64.74				57.17		16.47	

各セルの上段は頻度、下段は比率(%)、空欄は0を示す。
 Nは正答数：(ズレ0.25までの頻度×1) + (ズレ0.5の頻度×0.5)
 Σは縦の合計の頻度、%は正答率(N/Σ)を示す。

表 3-5 「刺激の性差」条件別の type 反応集束率

刺激	S	E	Z
反応・刺激性差	(%)	(%)	(%)
S・M	64.6	10.8	7.6
F	60.1	18.2	11.1
全	62.4	15.1	9.0
E・M	14.4	70.0	26.7
F	18.0	49.6	20.4
全	16.2	58.2	24.0
Z・M	6.9	9.1	53.8
F	9.4	19.1	55.5
全	8.1	14.9	54.4
合計	M頻度 1586 F頻度 1472 全頻度 3058	1696 2324 4020	1332 872 2204

%は縦の合計。ただし、SE、EZ、M、H、N といった中間型・特別な type を除いてあるので、表中の%をすべて加えても100%にはならない。

表 3-6 「評価者の diff.」条件別の type 反応集束率

刺激	S	E	Z
反応・評diff.	(%)	(%)	(%)
S・±~→~→+	62.7	16.5	7.0
+→+~→~	61.0	14.2	9.3
+~→+→++	66.2	15.2	11.6
全	62.4	15.1	9.0
E・±~→~→+	17.6	56.6	22.6
+→+~→~	16.0	57.9	23.1
+~→+→++	14.0	62.4	31.7
全	16.2	58.2	24.0
Z・±~→~→+	8.2	15.6	58.6
+→+~→~	8.4	15.3	54.3
+~→+→++	6.8	12.4	47.2
全	8.1	14.9	54.4
合計	±~→~→+頻度 965 +→+~→~ 頻度 1566 +~→+→++頻度 527 全頻度 3058	1271 2057 692 4020	696 1129 379 2204

%は縦の合計。ただし、SE、EZ、M、H、N といった中間型・特別な type を除いてあるので、表中の%をすべて加えても100%にはならない。

が Z (57.17) となっている。

次に、表 3-4 のデータを加工し、算出した指標を 2 種類述べることにする。

表 3-5 から 3-7 に示したものは、反応集束率である。これは各 type の刺激に対する反応がどの type に集まったのかを示す指標である。例えば、S 系の刺激 (S・Se) に対する反応のうち S 系の反応として現れた頻度は、表 3-4 の左端の 2 行 2 列 (刺激: S・Se/反応: S・Se) の頻度 (1114, 353, 250, 192) の合計 1909 となる。これを S 系の刺激の全頻度 (Σ : 1956+1102=) 3058 で割ると、S 系への反応集束率は 62.4% という値が出てくる。

このような計算を繰り返し、diff. の分析と同じ 3 条件 (表 3-3 参照) 別のデータを算出した。

表 3-5 に、刺激の性差条件別の type 反応集束率を示す。これを見ると、表 3-4 の「正答率」と同様、集束率が S>E>Z の順であること、また、E の女性は E と評価されにくい傾向が際だっていることが分かる。

表 3-6 に、評価者の diff. 条件別の type 反応集束率を示す。S・E の刺激に関しては diff. が高い方がやや集束率がよい傾向があるが、Z の刺激に関しては反対の傾向がみられるようだ。

表 3-7 に、評価者の type 条件別の反応集束率を示す。評価者の type はあまり集束率に関連していないようである。

表 3-7 「評価者の type」条件別の type 反応集束率

反応・評 type \ 刺激		S	E	Z
		(%)	(%)	(%)
S・E・Z 全	S	61.0	15.9	11.1
	E	62.9	15.4	8.3
	Z	64.3	13.4	8.1
	全	62.4	15.1	9.0
E・E・Z 全	S	17.5	60.0	26.3
	E	15.7	56.2	23.0
	Z	15.1	60.5	26.0
	全	16.2	58.2	24.0
Z・S・E・Z 全	S	8.2	13.0	52.1
	E	7.7	15.2	55.4
	Z	8.9	16.2	55.5
	全	8.1	14.9	54.4
合計	S 頻度 864	E 頻度 1136	Z 頻度 624	全頻度 2186
	1460	1918	1056	506
	709	933	506	2186
	3033	3987	2186	

%は縦の合計。ただし、SE、EZ、M、H、N といった中間型・特別な type を除いてあるので、表中の%をすべて加えても 100%にはならない。

表 3-8 条件別 type 正答率

条件 \ 刺激		S	E	Z
全体		68.7	64.7	57.2
刺激の性差	M	71.4	76.0	56.3
	F	65.7	56.5	58.4
評価者の diff	±~---~+	68.6	62.8	61.8
	+~---~+	68.0	64.7	56.8
	+~---++	70.9	68.6	49.9
評価者の type	S	67.3	66.5	53.9
	E	68.8	63.4	59.1
	Z	71.2	65.7	57.5

正答率は、 $(N/\Sigma) \times 100$ 。

次に、もう 1 つの指標である 3 条件別の「正答率」のデータを表 3-8 に示す。これは、表 3-4 の「正答率 (%)」と同様の算出の仕方 (N/Σ) を用いたものともいえるし、また、反応集束率の数値に、半分正解の、重みづけされた数値を加えたものといってもよいものである。

刺激ごとの「正答率」はやはり S>E>Z の順になっている。

刺激の性差条件では、男性刺激の方が「正答率」が高まるようであるが、その傾向は特に E で著しく、S でもみられる。やはり、E の女性は E と評価されにくい傾向があるようだ。

評価者の diff. 条件では、反応集束率と同様、S・E の刺激に関しては、評価者の diff. が高い方がやや「正答率」がよい傾向があるが、Z の刺激に関しては反対の傾向がみられるようだ。

評価者の type 条件では、やはり、評価者の type はあまり「正答率」に関連していないようであった。

3. 採否評価の分析

ここでは、126 名の受講者のうち、採否情報のある 66 名の評価者のみを対象として、分析を行った。表 3-9 にその type 別内訳を示す。これらの評価者は全員男性である。

どの type の評価者が、どの type の男女の刺

表 3-9 採否評価のある評価者数

評価者の type	S	E	Z	計
人数	21	30	15	66

表 3-10 type 別採用比率 (%)

評価者 \ 刺激	S			E			Z		
	M	F		M	F		M	F	
S	15.0	18.4		51.5	48.9		24.8	21.5	
E	10.3	10.0		51.1	49.0		28.2	31.2	
Z	15.9	11.4		50.4	52.0		23.8	27.1	

激を採用する傾向があるかをみるために、表3-10を作成した。この表のデータは、「採用」という判断を下した反応頻度の割合 (%) を示したものである。これを見ると、Eが最も採用されやすく、Sが最も採用されにくい傾向のあること、その中ではSとZの評価者がSの刺激を、Eの評価者がZの刺激を採用する傾向の高いことが分かる。

4. 新正答スコアによる diff., G, H, N, type の評価の分析

既に述べたように、「正答率」に関して、diff. では 68.6, type では 60.18 という値が算出された。diff. の方が 8 ポイント以上高い値である。しかし、その算出の仕方には若干の違いがある。diff. では、0.25 以内のズレを正解 (×1), 0.25 を越え 0.75 までのズレを半分正解 (×0.5) としていたのに対し、type では、0.25 以内のズレを正

解 (×1) とする点は同じだが、0.5 のズレのみを半分正解 (×0.5) とし、0.75 のズレはカウントしていない。

そこで、算出の仕方を統一した新しい「正答スコア」を diff., G, H, N の評価に関して出し、また、type についてもそれに準じる「正答スコア」を出し直すことによって、比較・検討を行うことにした。

まず、評価者と評価データの type をさらに詳細にカテゴライズするために、H, N, M など「その他」に分類される type を明確にし、また、気質類型の尺度について、元の「SE」を SE と ES に、元の「EZ」を EZ と ZE に分けることによって、S-Se-SE-ES-Es-E-Ez-EZ-ZE-Ze-Z と改めるなどの改訂を行った。

その結果、評価者の内訳も変化することとなった。表 3-1 の内訳と比較して若干の違いがある程度ではあるが、表 3-11 のデータがそれである。

次に、diff., G, H, N の評価について、評価のズレの分布を出し、正答スコアを算出した。ズレの分布と正答スコアのデータを表 3-12 に示す。ここでは、これまでの仕方とは異なり、0.75 のズレは「ズレ 1.0」の中にカテゴライズするように

表 3-11 評価者数とその内訳 (2)

type \ diff.	±0.25	±0.5	±0.75	計
S	8	18	9	35
E	21	31	7	59
Z	7	11	8	26
他	3	2	1	6
計	39	62	25	126

表 3-12 diff. (d), G, H, N の評価の集計表 (ズレの分布と正答スコア)

ズレ:	-2.0	-1.5	-1.0	-0.5	-0.25	0.0	0.25	0.5	1.0	1.5	2.0	Σ	N	スコア
d%:	1.2	4.2	12.9	14.1	17.2	19.4	13.5	9.3	7.1	1.0	0.2	12187	6595.5	54.1
G%:	1.0	1.3	7.2	1.7	1.2	55.7	5.5	3.1	20.5	1.5	1.2	12111	7644.5	63.1
H%:	5.3	1.6	26.4	4.6	1.5	36.0	4.1	3.1	14.7	1.2	1.5	12128	5349.3	44.1
N%:	2.5	0.5	15.3	5.5	1.0	58.2	4.7	2.4	8.8	0.6	0.4	12088	8032.0	66.4

Σは横の合計の頻度。
 Nは正答数：(ズレ0.0の頻度) + (ズレ0.25の頻度×0.75) + (ズレ0.5の頻度×0.5)
 ただし、0.75のズレは1.0の中に含まれている。
 スコア(正答スコア)：(N/Σ) × 100

表 3-13 条件別 diff., G, H, N, type の正答スコア

条 件		diff.	G	H	N	type
全 体		54.1	63.1	44.1	66.4	55.7
刺激の性差	M	52.1	59.7	46.9	65.7	59.6
	F	56.1	66.5	41.3	67.2	51.8
評価者の diff.	±~+~+~+	53.7	62.4	43.5	67.3	55.8
	+~+~+~	54.4	63.4	44.5	65.9	55.4
	+~+~+~+	54.1	63.7	44.1	66.3	56.4
評価者の type	S	55.6	65.5	42.0	66.9	55.1
	E	53.6	62.1	45.3	66.8	55.8
	Z	53.8	61.7	44.7	65.1	57.0

した。また、正解 (×1) はズレ 0.0 のみとし、0.25 のズレは 75% の正解 (×0.75)、0.5 のズレは半分正解 (×0.5)、0.75 のズレはカウントしないという方法で、正答数 (N) を計算し、これを全頻度 (Σ) で割って、正答スコアを算出した。つまり、すべての点で、これまでの方法より厳しい計算方法をとったわけである。

type の評価については、既に述べたように、気質類型の尺度を S-Se-SE-ES-Es-E-Ez-EZ-ZE-Ze-Z と改め、「-」1つ分のズレを 0.2 としてズレの分布を出した。そして、ズレ 0.0 を正解 (×1)、ズレ 0.2 を 80% 正解 (×0.8)、0.6 を 60% 正解 (×0.6)、0.4 を 40% 正解 (×0.4) として、正答スコアを計算した。気質類型は、本来画然と分けられる性質のものではないが、成績の比較上、あえて細かな計算方法をとることにした。

表 3-12 をみると、G は高い方へ、diff., H, N は低い方へ偏る傾向のあることが分かる。

全体集計に加えて 3 条件別でも正答スコアを計算し、表にしたものが表 3-13 である。辛目に集計する方針をとったので、diff. でも type でも、正答スコアは低い値となったが、特に diff. の落差が大きく、どちらも同じような数値になった。

type に関しては、表 3-4 のデータをそのまま用いて、正解 (×1) はズレ 0.0 のみとし、0.25 のズレは 75% の正解 (×0.75)、0.5 のズレは半分正解 (×0.5)、0.75 のズレはカウントしないという、

diff. 等と同じ方法でも計算したが、ここでも正答スコアは 54.59 となり、ほとんど差のない数値となった。

正答スコアで比較すると、diff. と type の評価の難易度にはほとんど差がないようである。

また、H の評価はやや難易度が高く、G と N の評価はそれらに比してやさしい傾向があるようである。

刺激の性差条件では、diff. と G は女性刺激の方が正答スコアがやや高まる傾向のあること、type, H は男性刺激の方が正答スコアが高まる傾向のあることが示された。

評価者の diff. 条件では、G の評価に関して、diff. が高まるほど正答スコアがわずかに上昇する傾向が示されたほかは、あまり一貫した傾向はみられなかった。

評価者の type 条件の正当スコアを見ると、S の評価者は diff. と G においてやや高く、H においてやや低い傾向が示されたほかは、あまり差のないデータとなった。

表 3-14 評価者の type 条件別 type の正答スコア

刺激 評価者	S	E	Z
S	62.4	59.3	48.8
E	63.7	58.1	52.5
Z	64.4	60.0	53.2
全	63.1	58.7	51.7

また、刺激の type 別に 3 条件の差を見るためのデータも算出してみたが、傾向は表 3-8 と同様であった。一例として、評価者の type 別の正答スコアのデータを表 3-14 に示す。ここでは、全体的には、Z の評価者の正答スコアがやや高いこと、刺激の難易度では $S > E > Z$ の順になること

などが示された。また、わずかな差ではあるが、S の評価者は S の評価が、E の評価者は E の評価が最も難しいが、Z の評価者にはそれがないことも、表 3-14, 3-8, 3-7 に共通する傾向であった。

4

考察

1. 全体的な評価傾向	93
2. diff. の評価	93
3. type の評価	93
4. G, H, N の評価	94
5. 採否評価	94
6. 評価者の type 別分布	94

1. 全体的な評価傾向

評価の難易度については、算出方法を厳密にした新正答スコアでいえば、diff. と type はほぼ同じ 55% 程度の数値を示した。また、G, H の評価は 45% と難しく、N の評価は 66% 程度で、それらに比して容易であることも分かった。

3条件については、刺激の性差は比較的大きな要因となるようであったが、評価者の diff. や type はあまり大きな働きをしていないように感じられた。

しかし、刺激の性差要因については、評価者が男性のみである点に留意する必要がある。

また、評価者の diff. に関しては、受講者の多くが企業の中堅管理者であり、ばらつきの幅は狭く、特に diff. が低い場合の傾向を明らかにしていないことに留意する必要がある。

また、当実験のデータは半年以上訓練を重ねた受講者のものであり、その訓練効果を考えると、未訓練の大学生を評価者とした曾野 (1971) や榎田・櫃田 (1971) のデータと直線的に比較することは難しい (榎田・櫃田の研究には、一部セミナ

ー受講者のデータが用いられているが)。

2. diff. の評価

diff. に関しては、偏りがマイナス方向に現れる、辛い評価の多いことが明らかとなった。

また、セミナーを通じてかなりの訓練を重ねているにもかかわらず、認定ケースに至っても訓練効果の現れることが明らかとなった。SCT は習熟のために努力・訓練が必要なことを示すデータといえるが、逆にいえば、努力すればするほど上達可能な技法ということもできる。

3条件別では、女性のケースの方が成績がよい。これは type その他の評価と異なる傾向である。

3. type の評価

正答スコアを刺激のタイプ別にみると、 $S > E > Z$ の順となり、対人認知の際に現れる刺激 type 別の難易度がここでも示される結果となった (伊藤・榎田, 1990 など)

3条件別のデータでは、男性ケースの方が評価の成績がよい傾向が示された。その傾向は特に E

のケースで著しく、女性のEのケースはSあるいはZという評価を受けやすい傾向のあることが明らかとなった。

評価者のdiff.条件については、あまり大きな差がみられなかった。強いていえば、S、Eの刺激に関してはdiff.が高い方が成績がよい傾向を示したが、Zの刺激に関しては逆の結果になってしまった。

評価者のtype条件についても、あまり大きな差がみられなかった。ただ、Sの評価者はSの評価が、Eの評価者はEの評価が難しいが、Zの評価者にはそれがない傾向がわずかながら示された。

4. G, H, N の評価

G, H, Nの正答スコアを比較すると、GとNの評価は成績がよい。特に女性のGは評価が容易なようである。また、Gは高めに評価される傾向があるが、80%をこえる刺激の正解が「±」であり、マイナス方向の偏りがほとんど出ようがないことを考慮にいれなければならない。逆にNは偏りが低めに出る傾向があるようだ。NはSと混同される傾向があるが、その程度はHの混乱の程度と比較して小さいようである。

一方、Hの評価は最も成績が悪く、また、低めに評価される傾向が強いようであった。Hは男性刺激の正答スコアの方が高い。Hの高さは、しばしばdiff.の高さやZと混同され、特に女性ケースのHの評価は男性評価者にとって難しい場合が多いようだ。

こうした点を考慮し、また、曾野(1971)のデ

ータなども参考にすると、Hは訓練が最も難しい評価項目であり、Hの評価が正しくできるようになれば、SCTによるパーソナリティ把握の習熟度はかなり高いといえるかもしれない。

5. 採否評価

採否情報に関しては、Sが最も採用されにくい傾向のあることが示された。特に、Eの評価者はSを採用しない傾向が強い。また、Eの評価者はZを採用する傾向が強い。

しかし、これをもって気質そのものの価値を判断したデータと考えることはできない。評価者は、SCTから読みとった、暗くエネルギーの無い被認知者像に反応しているに過ぎない。Eは自分との差が大きいので、採用率が特に落ちるようだ。いずれにしても、そうした被認知者像とSのケースとの関連性がたまたま高かったという判断が妥当であろう。

6. 評価者のtype別分布

最後に副次的なデータではあるが、日本人のtype別分布について言及しようと思う。

126名のデータであり、しかも、企業の人事担当中堅管理職という偏りはあるが、表3-1と3-11は、type別の比率を示している。Eが最も多く5割弱、次いでSが3割、一番少ないのがZで2割強という割合である。これは、我々が経験的に考えている比率、E:S:Z=3:2:1とはほぼ一致するデータといえる。

5

文献

- Allport G. W., *Pattern and growth in personality*, Holt, Rinehart and Winston, 1961 (今田 恵 (監訳)
人格心理学 誠信書房 1968)
- SCT 研究会 (編) 佐野勝男・榎田 仁 SCT 入門テキスト 金子書房 1986
- 伊藤隆一・榎田 仁 ヴィデオ映像を用いた対人認知に関する基礎的研究 組織行動研究, 18, 3-66, 1990
- 伊藤隆一・榎田 仁・岩熊史朗・西村麻由美 SCT 評価と評価者のパーソナリティの関係について 日本心理学
会第 56 回大会論文集, 131, 1992
- Kluckhohn C., Murray H. A. & Schneider D., *Personality in nature, society and culture*, 2nd ed.,
Knopf., 1953
- 榎田 仁・榎田紋子 パーソナリティと対人認知 3 日本心理学会第 34 回大会論文集, 447-450, 1971
- 榎田 仁・中野敬子・伊藤隆一 絵画空想法入門 金子書房 1990
- 佐野勝男・榎田 仁 精研式文章完成法テスト事例集——成人男性用・成人女性用—— 金子書房 1968
- 佐野勝男・榎田 仁 精研式文章完成法テスト解説 (新訂版) ——成人用 金子書房 1972
- 曾野佐紀子 他者のパーソナリティ把握における判断現象の分析——文章完成法テスト (SCT) を用いての Person
Perception の一研究—— 心理学研究, 42(4), 185-196, 1971